



学校だより

(9月号) 令和元年8月27日発行

<http://shibiraki-e.saitama-city.ed.jp/>

【学校の教育目標】

- ◎ 夢 (ゆめ) にむかって ともに学びあう学校
 - ・進んで勉強する子
 - ・自分からあいさつのできる子
 - ・仲よくたすけあう子
 - ・じょうぶな子

《今月の生活目標》 目標に向かって協力しよう

フェアプレー

校長 河井 尚



本日から第2学期が始まります。夏休みはいかがでしたか。各ご家庭で有意義で充実した夏休みを過ごしたことと思います。暦の上では秋となりましたが、まだ暑い日が続きそうです。皆様、どうぞ、ご自愛ください。



さて、今年の全国高等学校野球選手権大会は、履正社高等学校（大阪）が大会 NO1 右腕、星稜（石川）・奥川恭伸投手（3年）を攻略し、春夏通じて初の日本一に輝いて幕を下ろしました。履正社高等学校は、同じ大阪の強豪大阪桐蔭高等学校と異なり、寮がなく大半の選手が自宅から通学しています。練習時間も、午後5時から3時間程度で朝練習も強制ではありません。選手たちは帰宅後に自主的にバッティングセンターに通ったりして練習に励むそうです。松平一彦部長は「桐蔭が5時間練習しているのなら、（履正社は）6時間練習しないと、と言ってもできない。自分たちのスタンスで限られた時間の中で効率を上げる」と話しています。この考え方は、野球に限らず日常の我々の取組にも生かすことができそうです。



また、今回の選手権大会では、高校球児のフェアプレーや相手を敬うさやかな行為が話題となりました。花咲徳栄高等学校（埼玉）の菅原謙伸捕手（3年）が明石商（兵庫）戦で「自分のよけ方が悪かった」と死球を自ら“辞退”したプレーが称賛を受けました。相手のプレーに拍手を送る高岡商（富山）や、相手への敬意でガッツポーズを一切しない富島（宮崎）のようなチームもありました。智弁和歌山戦で足をつった星稜のエース奥川恭伸投手（3年）に、智弁和歌山の主将の黒川史陽内野手（3年）が攻守交代時に漢方の錠剤を渡したことも話題になりました。仙台育英（宮城）戦では同じく投球中に足をつった荻原吟哉投手（星稜・2年）の元に仙台育英4番の小濃塁外野手（3年）が駆けつけ、スポーツドリンクを手渡すシーンもありました。星稜高等学校の林和成監督は「野球っていいなあ」とベンチで見つめていたといいます。ある記事では、「令和最初の甲子園。勝利を追い求めながら、勝利にも勝る価値があることを表現した球児がいた。」（日刊スポーツ）と讚えていました。本当に素晴らしい光景がたくさん見られました。

最後に、星稜高等学校野球部の心温まる伝統についての記事を紹介します。

「自校に練習試合に来てくれた相手を全員で見送る。相手校のバスはグラウンドを出て5分ほどで目の前の高速道路に乗る。丘の上のグラウンドの端から、高速を走るバスが見える。部員全員で並んで待ち構え「ありがとう」を表現するウェーブ。20年以上続く伝統だ。相手校はバスの中で手を振って応えている。星稜側からはほとんど見えないが、ナインは満開の笑顔でバスが見えなくなるまで手を振り続ける。」（日刊スポーツ）